藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2025年7月
Vol.27

もくじ

展示紹介
「浮世絵で訪ねる藤沢宿と江の島道　参詣と観光の歴史」…… P1
描かれる参詣への道～藤沢宿と江の島道～ …… P2
古文書からみる江戸時代の庶民の旅 …… P3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑯　温泉旅行／浮世場なれ／編集後記 …… P4

浮世絵で訪ねる藤沢宿と江の島道
参詣と観光の歴史

会期　2025年7月18日（金）～9月15日（月・祝）

東海道の宿場である藤沢宿は、伝馬や物流だけでなく、旅の要所でもありました。そして東海道からの分かれ道である江の島道は、江の島詣に向かう参詣客でにぎわい、江の島は特殊な地形と富士山を眺めることができる風光明媚な名所として発展しました。

本展では、浮世絵や絵図のほか、写真も交えて藤沢宿と江の島の参詣と観光の歴史に触れていきます。

葛飾北斎「藤沢 平塚へ三里半」

二代歌川広重「東海道 藤沢」

描かれる参詣への道～藤沢宿と江の島道～

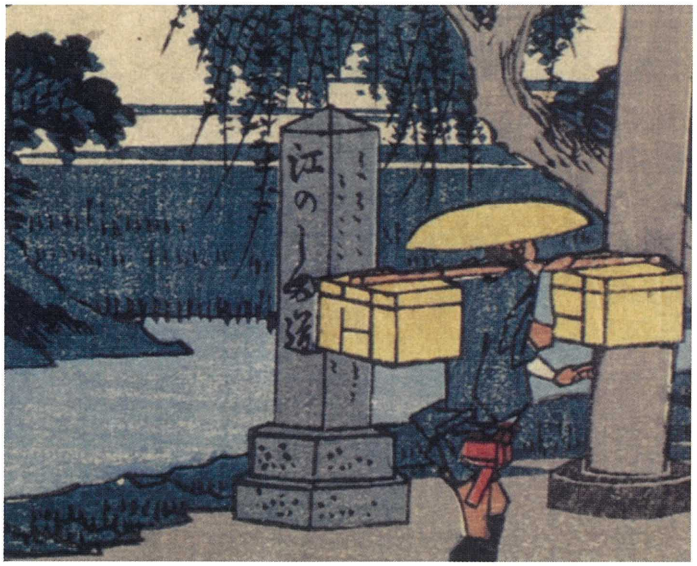
江戸時代後期になると、経済の発展や流通の増大により街道が整備され、信仰と娯楽を兼ねた一般庶民による旅が流行します。特に江の島は、江戸に住む庶民にとって近い場所にあり、風光明媚な景色や新鮮な海産物もあったことから、人気の参詣地となりました。

江戸から江の島へ向かうには保土ヶ谷宿や、戸塚宿から鎌倉を経由する道もありましたが、藤沢宿の大鋸橋から向かう道が主要だったようです。

【図１】歌川広重「東海道五十三次之内　藤沢（行書東海道）」

図１は、歌川広重が描いた藤沢宿の様子です。画中左には大鋸橋を渡り大山（大山阿夫利神社・大山不動尊）へ参詣した一行が描かれています。画中右には、「弁才天」と掲げられた鳥居と、その近くには道標が建てられていています。浮世絵に描かれる藤沢宿には、江の島一の鳥居と道標がセットで描かれる構図が多くみられます。

この道標は、江の島弁財天に参詣したことで、管鍼術（かんしんじゅつ）という施術方法を編み出した鍼灸師（しんきゅう）の杉山検校（すぎやまけんぎょう）によって、寄進されたものです。道標には、参詣するすべての人々が現世・来世で安穏、極楽を得られるようにと願いが込められています。道標は、４８基あったといわれますが、開発などによって現在はわずかとなってしまいました。図２は図１の道標を拡大したものです。そこには「江の島道」と刻まれています。江戸時代には鳥居をくぐると江の島へ案内するかのように各所に道標が建っていたようです。江の島へ通ずる道として「江の島道」と呼ばれていました。



【図２】歌川広重「東海道五十三次之内 藤沢（行書東海道）」一部抜粋

江戸幕府の道中奉行所が五街道と各宿場の様子を記録した「東海道宿村大概帳（とうかいどうしゅくそんたいがいちょう）」によれば、藤沢宿の名物として「大山詣で、江の島弁財天詣で」と記されています。大山と江の島を一緒に参詣することが流行し、江の島弁財天のご開帳と大山の例祭が重なる時期になると、藤沢宿は多くの人々でにぎわいました。

古文書からみる江戸時代の庶民の旅

小林紀子氏（横浜市歴史博物館 主任学芸員）

江戸時代の旅というと、弥次さん喜多さんの珍道中のような庶民の旅を思い浮かべる方も多いだろう。しかし江戸時代初期の旅は、おもに武士や文人たちが、信仰や文学・歴史に触れるために名所旧跡を訪れるものだったという。庶民の旅が増加してきたのは17世紀末～18世紀ごろで、背景には、幕府政治の安定と経済の発展がもたらした社会の安定があった。旅の目的も、次第に物見遊山の要素が加わり、人々は寺社参詣と物見遊山を織り交ぜながら各地の名所を訪れるようになった。18世紀末～19世紀になるとさらに旅する人々が増加していく。浮世絵に宿場や名所が描かれたり、多数の民衆が爆発的に伊勢神宮に参詣する御蔭参りが起こったりしたのも、この時期である。

旅人たちの中には、その行程や体験を日記に記録した者もいた。戸塚宿（横浜市戸塚区）で紺屋を営んだ友八は、文政7年（1824）、64歳の時に戸塚の文人仲間と伊勢参詣の旅に出、挿絵つきの日記を残した。日記によれば、友八一行の旅は東海道を伊勢へ向かい、奈良、高野山、讃岐の金比羅宮、明石、須磨、大坂、京都を経て中山道で善光寺、さらに日光をまわり、日光街道で江戸へ出て東海道で戸塚に帰るという約3か月にわたる大旅行であった。このように当時の伊勢参詣の旅は、（経済力にもよるが）伊勢に加えて西国などを巡るというコースが、ある程度定番化していたという。

「戸塚宿紺屋友八西国旅日記」より青木友八が描いた二見浦の風景
文政7年（1824）、横浜市歴史博物館所蔵、画像提供

一方、江の島や大山、鎌倉、金沢八景なども、江戸に近い身近な名所として知られ、浮世絵や名所記、絵図など関連する資料が多く伝わる。これらの名所も伊勢参詣同様、ある程度決まったコースがあった。たとえば江の島～鎌倉～金沢八景コースはその一つである。幕末の安政6年（1859）、このコースを旅し、「江之嶋紀行」と題する絵入りの紀行文を書いた人物がいた。深川に住む「志羅川庭月」なる人物である。庭月は東海道藤沢宿より江の島道に入り、江の島の下之宮、上之宮、岩屋などを訪れたのち七里ヶ浜を経て鎌倉へ入り、鎌倉観光を楽しんだのち金沢八景を訪れている。ただし庭月の旅の終わりはここではない。最後の庭月の訪問地は開港間もない横浜であった。新たに誕生した名所である横浜開港場が伝統的な旅のコースに加わっており、社会の変化とともに名所も変化していくことがわかると同時に、現在に続く横浜関内地区の観光名所としての萌芽も感じ取ることができる。

志羅川庭月「江之嶋紀行」より
横浜開港場を描いた図。外国人の姿も描かれている。
安政6年（1859）、横浜市歴史博物館所蔵、画像提供

二代目オニカゲ学芸員のページ⑯

温泉旅行

皆さん、温泉は好きですか？ 江戸時代には旅の目的のひとつとして湯治場（とうじば）に行くことが人気でした。

かつて中世では武士たちが戦いでできた傷を癒すために、湯治をしていました。そして、戦乱の世が終わり、江戸時代になると、武士だけではなく身分の高い人や裕福な人々なども湯治へ行くようになりましたが、庶民にとってはまだ気軽に行けるものではありませんでした。なぜなら、湯治に行くには「三巡り」（約 21 日間）もの日数を要し、またその間の旅費も必要だったためです。

江戸時代後期頃になると、庶民の間で一泊から二泊の短い期間での「一夜湯治」が広まります。一夜湯治は気軽に湯治が行えるほか、湯治場周辺の観光もできたことで、庶民の間で普及していきました。いまでいう日帰り温泉のようなものだったのかもしれません。

【図】版元 堂ヶ島大和屋太郎左衛門「箱根七温泉図」江戸末期頃

江戸の人々にとって人気だった湯治場のひとつに、箱根がありました。箱根の湯治場としての歴史は奈良時代から始まり、江戸時代には「箱根七湯」（湯本、塔ノ沢、底倉、宮の下、堂ヶ島、木賀、芦ノ湯）が代表的な湯治場となりました。そして浮世絵や滑稽本の後押しもあり、「西は有馬、東は箱根・熱海」と評されるほど、箱根の湯治場としての知名度は高まっていきました。

編集後記

当時の記録や浮世絵を見ると、参詣や湯治は現在と変わらない娯楽のひとつだったことがうかがえます。本展では、参詣と観光を楽しむ人々の様子を、藤沢宿や江の島を題材にした浮世絵や各資料を通してご覧いただけたら幸いです。そして、今回ご寄稿いただきました横浜市歴史博物館の小林紀子先生には、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館
【住所】〒251-0041神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817
【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのために休館日がございます
【H P】藤沢市藤澤浮世絵館 で検索　【公式Instagram】fujisawa.ukiyoe で検索
facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント「いいね！」お願いします。
キュとする藤沢